

彙報

哲學倫理學會

三月十一日午後六時半より學生集會所に於て例會を開き、左の講演あり。

心理的非心理的

文學士 務 臺 理 作 君

心理學讀書會

三月三十日午後三時半より心理學實驗場に於て例會を開く、講演左の如し。

米國見聞談、バツシーインスチチュート

に於ける遺傳研究、クラーク大學近況

其他。文學博士 内 田 銀 藏 君

社會學會

三月十九日。學生集會場に於て開會す。米田講師を初めとして、社會學專攻生全部出席し、村田太平氏の講演あり。講演は、シカゴ大學ヘンダーソン教授の論文の翻譯にして、大要左の如し。

工業及都市生活と家族

都市の状態が家族生活にとつて有害なりといふは、如何なる事實を指すか。而して此有害の事實は、都市生活に必然的に附き纏ふ固有のものであらうか。又是等は既に世人に知られてゐる方法

によつて、果して改良し得るや如何。若し又是によつて改良し得ずとせば、吾人は如何なる方面に、新なる研究を進めねばならぬか。

以上四つの問題に答へるのが、本論文の要旨である。

先づ都市生活には、疾病及死亡が多い。其原因の主なるものは、一、人口の密度の大なること、二、流行病の危険多きこと、三、職業から生ずる病氣、四、住宅の不完全、五、娛樂機關及修養の場所に人の密集すること、六、小兒の死亡率については、尙特殊の原因がある。

又都市は出産率が低い。生活費の高價なること。収入の不確實なること、妊婦の養生の出來にくき事等が、重なる原因をなしてゐる。

都市生活は又一夫一婦制度の維持に不適當である。都市には又離婚の數も多い。かく考へて來ると、都市生活、近代的工業生活は、決して家族に對して、よき影響を及ぼすとは言はれない。或著者は社會的淘汰といふ點から考へて、都市生活の價值を高潮してゐる人もあるが、此種の淘汰は、あまりにコストリーなものと云はねばならぬと思ふ。

扱つら／＼都市生活上の苦痛を見ると、避くる事の出來ない運命や、盲目なる自然力から來たものは一つもない。すべて是人間が選びとつて、人間が行ふた結果である。だから科學の偉大なる結果を以てすれば、之を改めることは不可能ではないのである。然らば如何なる方針の下に之を行ひうるであらうか。先づ第一にけ元氣旺んにして健全なる者に、多くの子を産ましむる如く教育

する、ユーゼニックスを適用する。しかし之が利用適用には、種々の制限のあることを忘れてはならぬ。そこでどうしても、結局は不健全者の隔離所や、苦痛なき去勢法を用ひなければならぬ様になる。尙低級移住民の來往を防止することも必要である。其他強制保険制度、衛生状態の改修等學術の應用と熱心の努力等によつて、都市生活が家族に及ぼす不健全なる影響を、とり去ることが出来ることを、私は確信するものである。云々。

月 曜 會

三月十七日午後七時より醫科大學生理學教室に於て開會、石神學士の本誌三月號に發表したる『機能的宗教心理學』に就て討究せり。石神、赤松、黒田、植田、安部、山内、久松諸君出席す。

倫理學綱要

ダーシー著
紀平 正美共譯
八木沼源八

大同館

哲學雜誌、心理研究、東洋哲學、六合雜誌、東亞之光、無盡燈
密宗學報、早稻田文學、學校教育、教育、内外教育評論、國民教育、教育學術界、教育界、教育研究、教育時論、東京教育、奈良縣教育、靜岡縣教育、近江教育、岐阜縣教育、都市教育、信濃教育、佐賀縣教育、長崎縣教育雜誌、宮城教育、愛媛教育、

前 號 目 次

支那思想史より觀たる河南省	文學博士 服部 宇之吉
藥師寺三尊論	文學士 土 田 杏 村
アリストテレスの倫理と經濟	文學博士 藤 井 健 治 郎
實踐的感情移入説に就て	文學士 尾 生 光 三 郎
最近心理學の發達	文學士 深 田 武